
【短編】冬の月 ~ winter platform ~

月詠 誓奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【短編】冬の月 ~ winter platform ~

【Nコード】

N1287BA

【作者名】

月詠 誓奈

【あらすじ】

初投稿で短編小説です。

恋に疎い主人公の、初恋と切なさを書き綴ったものです。

出会いは後に思い出となり心に刻まれ、

思い出は永遠となり記憶に繋がり、

別れは心と記憶に深い傷を刻む。

人の感情を描いたものです。

強さはそれぞれの強さがありますし、弱さも同じ。

でも、考え方や行動によりいくらも変えられる。

純粹な、かつ深刻な純愛は主人公に何を思わせ行動させるのか

いつもどおりの日常、いつもどおりの生活。
いつもどおりの時間、いつもどおりの場所。
人の少ない駅のホーム。

今の時刻はちょうど深夜0時を回った頃だ。

人もいない真っ暗な空間の中、駅のライトと月明かりだけが照らす
時間。

見渡す限り、今ここには僕ひとりしかいないのがわかる。

そんな中、ずっと昔にキミに合ったことを思い出した。

初めて出会ったのもこんな風景でこんな空間だった。

そして、僕が初めて恋心を抱いたのも、この時のキミが初めてだっ
た。

終電が近いことに焦ったのか、

キミは駆け足でこのホームに降りてきた。

ちょうど来た電車に駆け乗っていった時、カバンにかけていたマフ
ラーがホームの地面に落ちる。

キミはそれに気付くこともなく閉まりかける電車に乗り込む。

ほっ と胸を撫で下ろした時に気付いたものの、ドアは無情にも閉
まった。

キミの焦った瞳が僕を捕らえる。

僕は咄嗟にそのマフラーを手にしていたから。

たった一瞬ではあったものの、目と目を合わせた。
次の瞬間には電車はホームから離れていってしまったが、僕はキミの顔を、何より その瞳 を覚えていた。

翌日にキミは同じ時間、深夜のホームに姿を現した。

しばらくキョロキョロと辺りを見渡す姿を見つけ、僕は持っていたマフラーを持ち声をかけた。

するとキミは僕を見た時に駆け寄って頭を下げた。

覚えていたのかと、正直驚いた。

マフラーを受け取り、綺麗にキミは笑うとお礼を言う。

その笑顔に僕は初めて恋をした。

それからの毎日、同じ場所、同じ時間にこのホームで語り合った。

毎日の変わらぬ日常が、キミという たったひとり により塗り替えられた。

いつしかそれが日課となるくらい、僕には 当たり前 の習慣となっていた。

今僕はひとり、誰もいないホームで佇む。

ほんの少し、キミとの出会いを思い出していただけなのに、気付けば空は一層冷たく、暗くなっていた。

その冷たく刺すような寒さに

僕は胸に抱いたマフラーを ぎゅっ と抱きしめた。

ふと視線を落とした時、白い粉が見えた。

顔を上げると、空から白い雪がこぼれ落ちてきていた。

僕はその暗闇をまとう空から注ぐ月明かりと、真っ白の雪を見上げ、見つめていた。

空は一層暗く、そこに輝く月は美しく、注ぐ光は柔らかい。こぼれる雪は僕に向かい落ち、寒さは僕にまわりつく。息は白く吐かれ、全身を冷たさが走る。

ぎゅっ と胸の中でマフラーを抱きしめると、見上げた頬に温かさが伝う。

しかしそれはすぐに冷たい風にさらされ、冷たく伝い落ちる。同時に、激しいくらいの胸の締め付けを感じた。

今、僕の頬を伝うのは涙という、目に見えない感情の形。

月だけが見つめるホーム。

月だけが知る僕の涙（想い）。

月だけが照らす僕の心。

ただひとり、月の照らす下で僕はキミを想い…探した。

逢いたくて、ただ逢いたくて。

わかったんだ、幸せはひとりじゃ掴めない。
ふたりいて、初めて掴めるんだ。

だからキミに逢いたい。

だけど、いくら必死に探しても見つかることはできなかった。

キミはもういない。

わかっていた。

キミは昨日、不慮の事故に合い、その尊い命を散らした。

嘘だと流れ星に願ったが、嘘じゃなかった。

その時、キミのマフラーが僕に手渡された。

それが最期の願いだったらしい。

明るさで彩られた笑顔、涙で濡れた笑顔…。

僕には笑顔のキミしか思い浮かばないくらい、愛していた。

行かなくちゃ…。

キミに今逢うために…。

キミの笑顔に逢いにいこう…。

またキミにマフラーを返さなきゃ…。

僕は空に向かって手を伸ばす。

片手にはマフラーを抱き抱えたまま。

月に手が届く。

月明かりより眩く強い光に照らされながら。

着馴染んでいた駅員の制服。

それは強い光に照らされ、一層黒く色付いていた。

聞き慣れない電車の鳴く声。

それが僕の耳に届いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1287ba/>

【短編】冬の月～winter platform～

2012年1月3日04時00分発行